

## 第7回 石狩川下流幌向地区自然再生ワークショップ 議事概要

日 時：平成31年2月27日（水） 9:30～12:00

場 所：南幌町ふるさと物産館「ビューロー」3階会議室

出席者：

矢部 和夫（札幌市立大学 大学院 デザイン研究科 教授）座長

尾暮 靖志（南幌町 都市整備課 課長）

木村 浩二（雪印種苗株式会社 環境緑化部 緑化事業課 自然環境グループ）

新田 紀敏（北海道立総合研究機構 森林研究本部 林業試験場 森林環境部 主任主査）

近藤長一郎（NPO法人ふらっと南幌） 代理出席

矢部 浩規（寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 寒地河川チーム 上席研究員）

村山 雅昭（寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 水環境保全チーム 上席研究員）

松田 泰明（寒地土木研究所 特別研究監付 地域景観ユニット 総括主任研究員）

渡邊 一靖（札幌開発建設部 河川計画課 流域計画官） 代理出席

足立 文玄（札幌開発建設部 江別河川事務所長）

### ■平成30年度の活動報告

#### （1）物理環境調査結果報告

遮水整備（乾燥していた表土剥ぎを含む）により、湿生植物の生育に適した物理環境は維持できていると考えられる。栄養塩類の流入箇所は限定的であり、深刻なものではない。今後もモニタリングを継続する。

#### （2）湿原再生ミーティング活動報告

現時点ではボグを構成する植生は優占していないが、整備後の湿生植物生育に適した環境は維持されており、植生導入を継続する。導入した植生の中で生育がよくなかった、育たなかった種は次年度以降、対策を講じていく。なお、ボグ構成種以外の現地の湿生植物を除去する必要はない。

#### （3）利活用ミーティング活動報告

駐車スペースの整備は①現状のもの（樹木など）を活かす、②再生地の植生への影響を避ける、③流下能力の低下を避ける、④時間軸（樹木成長）を考慮する、⑤コスト、⑥利用状況を見ながら段階的に進める、を考慮して樹木配置など、継続整備する。

#### （4）平成31年度の取り組み予定について

外来種駆除イベント（利活用ミーティング予定）は、駆除の対象、識別のしやすさ、種

が落ちる時期を考慮し、10月ではなく8月頃が良い。

これまでのワークショップは委員会に近い形であったため、みんなで作りあげる形にしていきたい。

古写真はみんなの気持ちがまとまる良いツールになる。南幌町の歴史を知ることやこの活動の助けになるので、収集公開等を是非進めてほしい。

#### ■意見交換

<自然再生は現在の事業主体から地域主体の取り組みとして継続していく事が必要。湿原の魅力や価値、取組みの必要性などについて理解や共有を得るための意見を交換>

- ・積極的な勉強会、講演会の開催、継続が必要
- ・新篠津ツルコケモモの会の経験ではイベントに関して新聞折り込みを行ったところ、参加者が集まり、丁寧な情報発信が必要と感じた。
- ・再生地でのイベントでは、ミズゴケに興味を示す人も多く、ミズゴケを株分けして現地育苗するフロートを作る体験は人気があった。ミズゴケを増やすためのイベントも良い。
- ・泥炭層はタイムカプセルのようなもの。ホロムイコウガイなどの湿生植物も珍しいことから、幌向再生地で初めて目にする人も多いのではないかと。いろいろな植物を見ることができる魅力があると思う。
- ・幌向再生は、環境、歴史、地域活性、親水利用など多くのメリットがあると思われる。今後、継続的に活動をするために核になる人には全てを伝える、あるいは勉強していただく必要があるが、それ以外の一般の方には参加して楽しいなどの参加しやすい環境づくりが大切と思う。
- ・漁川の川塾における取組みでは参加した子供たちの中で高校生になって、今度は自分達が教えたいと言うリピーターもいる。子どもたちにリピーターとなってもらえる取組み、リピーターを見つけることも大切。
- ・東北の海浜植物保護の取組みでは、小学生を対象に海浜植物の観察や育苗を行っているが、育苗は小学生が世代交代しながら取り組んでいる。参加対象が広がっていく取組みも大切。
- ・特に子どもを対象として考えることが重要。年1回でも学校が参加してくれるよう、学校にとっても自然再生がメリットとなる取組みが大切。
- ・九州の遠賀川では、子供たちが世界水フォーラムに参加する取組みを継続している。何年後かに世界水フォーラムに参加する等、少し大きい目標を掲げてほしい。

以上